

『一遍聖絵』研究上生じ たる問題点について(二)

岡 本 貞 雄

昨年に続き『一遍聖絵』の中から以下の問題点について考察を加えることとする。

(一) 弘安二年信州に於ける別時念仏について

(二) 断食について

(三) 『一遍聖絵』第四第十紙に

同年八月に因幡堂をいで、善光寺へおもむき給ふ道の間の
日数自然に四十八日なり 其の年信濃国佐久郡伴野の市庭の在
家にして歳末の別時のとき紫雲はじめてたち侍りけり 抑々を
どり念仏は空也上人或は市屋或は四条の辻にて始行し給ひけり
とある。弘安二年八月に京都を出発した一遍一行は、十月前後に
信濃に到着し念仏勧進を行なつたことは容易に想像され得ようが、
ここで問題としたいのは、佐久郡伴野の市庭の在家で行なわれた別
時が、歳末別時であつたかどうかである。『一遍聖絵』は一遍の伝
記をおおむね編年体で記しているが、その原則からすると、歳末別
時の記事の後に続く内容は弘安三年のことにならなくてはならない
はずである。しかし『一遍聖絵』は弘安二年の事歴を第五第一紙ま
で記している。そしてその第五第一紙は弘安二年冬のことを記して
いるのであるから、それ以前に記されている伴野の別時が歳末別時

とは考えられない。作者聖戒の誤記か、筆写した人物の誤写と推定
するべきであろう。初めて紫雲がたつた時のことであるから、信州
の事歴の最初に記したとも考えられるかもしれない。確かに聖戒は
紫雲のことを何度も記しており、一面その宗教的意義を認めている
ような印象を受ける。しかし一遍自身は常に紫雲を無視しており、
聖戒自身も第十二第十紙に於て

まことに彼の瑞華も紫雲も出離の詮にはたゝぬ事をあらはして
と述べている如く、紫雲がたつたことを、ことさら記する必然性
はないといつてよからう。さらに第四第十二紙と第五第二紙に描か
れている絵を比較してみると、両方とも冬の雰囲気を出しているよ
うであるが、第五第二紙は第五第一紙の文章を受けたものか、景景
色を示すのに雪山を描いているのに対し、第四第十二紙は晩秋の景
色のようにも取れる描き方をしているようであり、十月前後に善光
寺に到着し、善光寺から下つて佐久郡一帯に到りその年一杯勧進し
たありさまを、時季の推移と共に描いているように思われる。もし
絵が史実にそつて描かれているとすれば、伴野の念仏は、歳末別時
ではなく、普段に行じられる別時であつたとみてよいように思われ
る。しかし第四第十二紙の絵には、ずつと後一遍一行が東海道を遊
行した時であろうか、江州守山のほとりの瑠魔堂で会見したことに
なつてゐる、延暦寺東塔桜本の兵部堅重豪という人物が、あたか
も伴野の別時念仏中に一遍と相對して会見しているがごく描かれ
ており、絵についてもそのまま信じるわけにはいかないようであ
る。断定することには無理があるようであるが、文章と絵を総合的
に判断して、伴野の別時を歳末別時とはみず、聖戒もしくは筆写し
た人物の筆がすべつたものと推定してよいように思われる。

(二)『一遍聖絵』は断食について、第六の第一紙に

弘安五年三月二日かたせの館の御堂といふところにて 断食して別時し給ふ

と記し第六第八紙に

よりてこの地に於て七日の行法をはじめ給ひけるに 供養のちからつきて時僧うれへの色見えければ 聖しめし給はく 断食によりて法命つくることなしかならず宿願果すべし

と記している。断食についてはこの二ヶ所しか出てこないが、第八紙の内容からすると断食は行とはなつておらず食物の供養がないならば断食もやむおえないとする一遍の態度がうかがわれる。つまり食を得んがために勧進するよりも、一度七日の行法を始めた以上その行を成就することの方が重要であつて、結果として断食することになつても、それは問題とならないとしているのに対し、第一紙でははつきりと断食して別時を行なつたことを記している。過去の研究を見ると、ただ断食を修したとだけされているようであるが、第一紙の場合直前の第五第九紙に

よりてそのよは山のそはみちのほとりにて念仏したまひけるにかまくら中の道俗雲集してひろく供養をのべたてまつりけり
とあり、第一紙での断食は食物が不足して断食したという単純なものではないようであり、何らかの意味を持つてるように思われる。時宗教義に断食して別時を修するということについて釈明がないならば、一遍の行なつた断食の意味は問題にされてしかるべきだと思われる。断食とは本来、祈願成就のため一定の期間食を摂取しないという行として伝えられているようであるが、もしその意味で断食を行なうとすれば、一遍が鎌倉入りに際して

鎌倉いりの作法にて化益の有無をさだむべし 利益たゆべきならば 是を最後と思ふべき

と第五で時衆に示した時に行なわれるべきであろう。それを鎌倉入りに失敗した後になつて行なつたことでは、鎌倉入りを阻止した時の権力に対する抗議ぐらいいしかその意義を認めるわけにはいきまい。『一遍聖絵』を見る限り、一遍は世俗の法に対して、ことさら無視しているようであり、念仏の絶対性、至上性を常に主張し続けた一遍が、念仏勧進をはばまれたとはいへ、それが原因で特別に断食したとすれば、その時点で断食して行ひ念仏と只の念仏との二種類の念仏を認める結果になつてしまひ、一遍の念仏思想理解の上で大きな問題となるのではなからうか。(一)でも少し述べたが、紫雲という非現実的事象については、全く無視といつてよい態度をとつた一遍が何故断食という、ある意味では非常に人間的な方法を念仏と共に修したのか理解に苦しむところである。かたせでの断食と時期を前後して、常識的にはとらえにくい現象が『一遍聖絵』の文章中に記されるようになる。それ以前では熊野の夢告ぐらしか記されていない非現実的事象が、第五から第十二、時期的には一遍の教団が急速に発展する時期にあたつてしばしば出てくるようになるのであるが、このことを断食と合せて考えてみると、時宗教団の増大に伴つて、その統制、維持のために、一方で一遍の超人的性格が必要になり、一方で増加していく時衆達の信心強化のため、あえて一遍の念仏の根本義をくだつた行動を取ることやむなしとしたものとも考えられるが、本論では、断食した理由については不明とし、あくまで断食そのものの行為が一遍の思想に反しているのではないかという疑問にとどめることとする。(大正大学大学院)